

第一章 硝煙の消えた静寂で、不器用な指先が絡み合う

山あいにはひっそりと佇む老舗旅館の門を潜った瞬間、冷涼な空気が肺の奥まで染み渡る感覚があった。

アリスの、あの救いようのない虚無感に満ちた地下の冷気とは違う。木々の香りと、どこか遠くて響く水の音。それから、微かに鼻腔をくすぐる硫黄の匂い。

俺の隣を歩くサオリは、相変わらずいつもの格好だった。黒いキャップを深く被り、ヘソ出しのノースリーブに、肩から無造作に羽織った白いコート。戦場ならいざ知らず、この長閑な温泉街では、彼女の放つ威圧感と「専門家」としての鋭いオーラは、あまりにも浮いていた。

「……先生。本当に、ここで合っているのか」

サオリが足を止め、低く落ち着いた声で尋ねる。その視線は、旅館の立派な瓦屋根や、丹精込めて整えられた庭園に向けられていた。

彼女の横顔には、警戒心というよりは、むしろ戸惑いに近い色が浮かんでいる。ブラッ

クマーケットでのバイトならいざ知らず、こういう「純粋な休息」という概念に、彼女はまだ慣れていない。

「ああ、間違いないよ。今日は二人でゆっくりするって決めたからね」

「虚しい……。これほどまでの贅を尽くした場所で、私のような者が過ごすことに、何の意味があるのか。……いや、済まない。先生が用意してくれたものに、水を差すつもりはなかった」

サオリは自嘲気味に首を振ると、少しだけ歩幅を狭めて俺に寄り添った。コートの裾が俺の腕に触れる。

彼女はアリュウススクワッドのリーダーとして、常に張り詰めた糸のような緊張感の中に身を置いている。全ては虚しいというニヒリズムを盾にしなければ、保てないほど過酷な日々を過ごしてきた。

だからこそ、今日くらいはその鎧を脱がせてやりたかった。

仲居さんに案内されて部屋に入ると、そこには見事な畳の間と、大きく開かれた縁側から

望む絶景が広がっていた。

サオリは部屋の四隅を無意識に確認し、退路や死角をチェックしているようだったが、俺が「まあ、座って」と促すと、ようやく観念したように座布団に腰を下ろした。

「……落ち着かないな。足元が柔らかすぎる。……先生、この部屋には『壁』がないのか？
これでは、外部からの狙撃に対して脆弱すぎるのではないか？」

「ここは先生を信じて。今日は敵もないし、アリウスのモットーも一旦お休みだ」
「……先生がそう言うのなら。私は、先生に従うだけだ」

そう言って、彼女は僅かに口角を緩めた。その僅かな変化を見逃さない程度には、俺も彼女の顔を見ているつもりだ。

仲居さんがお茶を淹れて去っていくと、部屋には再び静寂が訪れる。

サオリは手持ち無沙汰そうに、テーブルに置かれた茶菓子をじっと見つめていた。

「……『温泉まんじゅう』、か。……ふふっ」

「えっ、どうかした？」



「いや……。饅頭の中に温泉が入っているわけではないのだな、と今、冷静に考えてしまった。……。ぶっ、あははは！」

突然、彼女が吹き出した。さっきまでの冷徹な兵士の面影はどこへやら、彼女は腹を抱えて笑い始めた。一度ツポに入ると止まらない、彼女の「笑い上戸」な一面だ。

「先生、今の……。っ、私としたことが。ブラックマーケットの店主に『温泉の源泉を練り込んだ究極の液体饅頭だ』と騙されそうになったことを思い出してしまった。……。ああ、可笑しい。この世は、やはり妙なことで溢れているな」

目尻に涙を浮かべて笑う彼女を見ていると、こちらの胸の奥まで温かくなる。

やがて笑い疲れたのか、サオリはふう、と長い吐息をついた。その視線が、部屋の隅に用意された浴衣に向けられる。

「先生……。その、着替えというやつを、しなければならぬのだろうか？」

「そうだね。まずは浴衣に着替えて、それからお風呂に行こうか」

「わかった。……この、『ゆかた』という戦闘服の構造を、私に教えてくれないか。見たところ、防御力は皆無のようだが……」

サオリは立ち上がり、コートを脱いだ。

目の前で、彼女の引き締まった肢体が露わになる。黒いノースリーブのインナーに包まれた、その驚くほど豊かな膨らみ。

彼女は自分の容姿に無頓着なところがあるが、その身体は「兵士」として鍛え上げられていると同時に、成熟した女性としての抗いがたい魅力を放っていた。特に、その胸の大きさは、インナーの生地を限界まで押し広げ、深い谷間を形成している。

俺が浴衣の着方を説明しながら、彼女の着替えを手伝うことになった。

サオリは素直に俺の前に立ち、両腕を軽く広げた。

「……済まない、先生。こういう繊細な布の扱いは、どうも苦手だ。アリウスでは、破れな
いことと動けることだけが重要だったからな」
「いいよ。ゆつくり覚えればいい」

彼女のインナーの裾に手をかける。指先が、熱を帯びた彼女の腹部の肌に触れた。

サオリの身体が、ビクンと小さく震える。

「……っ」

「サオリ？」

「いや……なんでもない。先生の手が、少し温かかっただけだ」

彼女の声が、少しだけ上擦っている。

インナーを脱がせると、そこには眩いばかりの白い肌と、重厚な質量を持った双丘が露わになった。

何度も戦場を潜り抜けてきた彼女の身体には、細かな傷跡もいくつか残っている。けれど、その傷跡さえも、彼女が生きてきた証として神々しく見えた。

何より、至近距離で見る彼女の胸は、想像を絶する迫力だった。重力に従って僅かに形を変え、中心には淡い色の蕾が緊張に震えている。



「……先生。あまり、見ないでくれ。……恥ずかしい、という感情は、私には無縁だと思っていたのだが。先生の前にこうして立つと……胸が、高鳴る……！」

彼女はトレードマークの台詞を、今度は戦場ではなく、情愛の文脈で口にした。

俺は震える手で浴衣を彼女の肩にかけ、袖を通させる。

しかし、問題が発生した。

彼女の胸があまりに大きすぎて、標準的なサイズの浴衣では前を合わせるのが困難だったのだ。

「……入らない、な。布が足りないようだ。やはり、私はこういう優雅なものには向いていないのかもしれない。……バナタス・バナタム。私の身体の構造すら、この場所には適応できないのか」

「そんな悲しいこと言わないで。……ちよつと待って、こうすれば……」

俺は彼女の背後に回り込み、浴衣の襟を整えながら、グッと前へ引き寄せた。

背中に、彼女の温かい体温と、柔らかな肌の感触が伝わってくる。

サオリの長い黒髪から、シャンプーの匂いとは違う、彼女自身の体臭——少しだけスパイシーで、それでいて女性らしい甘い香りが漂った。

「先生……近い」

「しつかり合わせないと、はだけちやうからね」

俺は必死に理性を保ちながら、彼女の豊かな胸を浴衣の中に収めようと奮闘した。

右から、左から。

布越しに、彼女の乳房の重みが掌に伝わる。柔らかい。それでいて、芯には確かな生命の弾力がある。

サオリは俺に身を委ねるように、僅かに背中を預けてきた。

「……先生の指先が、震えている。……ふふ、専門家らしくないな。……でも、悪くない。先生にこうして触れられていると、アリウスの冷たい夜を思い出さなくて済む」

ようやく前を合わせ、帯を締める。

浴衣姿になったサオリは、普段の攻撃的なスタイルとは打って変わって、しっとりとした大人の女性の雰囲気を感じていた。

しかし、やはり胸元はかなり窮屈そうで、深く開いたく字のラインからは、今にも溢れ出しそうな白い肌の溪谷が覗いている。

「……どうだろうか。変ではないか、先生」

「……すごく、綺麗だ。本当に」

「……そうか。先生がそう言うのなら、信じよう」

彼女は照れ隠しに、首筋を指先でなぞった。

その仕草一つひとつが、俺の理性を削っていく。

サオリは自分の胸元を少し気にしながら、俺の顔をじっと見つめた。

「先生……。温泉に行けば、これをもっと脱がなければならぬのだろうか？ ……正直に言おう。今は、その……少しだけ、怖い。……先生の知らない私を、さらに晒してしまうのが」

「俺は、サオリの全部を知りたいと思ってるよ。傷跡も、不器用なところも、全部」

「……………ああ、ずるいな、先生は。そう言われてしまえば、私は拒む術を持たない」

彼女はふっと微笑むと、今度は自分から俺の手を取った。

指と指が絡み合う。

彼女の手の平には、銃を握り続けてきた硬いタコがある。その武骨な感触が、今の俺には愛おしくてたまらなかった。

「行きましょう、先生。……………この温かさが虚無に消えてしまう前に。今の私を、しっかりと刻みつけてほしい」

二人は部屋を出て、湯煙の立ち込める大浴場へと向かう。

廊下を歩くたび、浴衣の裾から覗く彼女のしなやかな脚と、歩調に合わせて揺れる大きな胸が、俺の視線を奪い続けた。

まだ夜は始まったばかりだ。

温泉の熱気と、その後待つベッドルーム。

サオリの心音は、俺の手に伝わる脈動として、確かに激しく刻まれていた。

「先生……。……離さないでくれ。……今は、ただの私として、先生の側にいたいんだ」
彼女の絞り出すような呟きが、静かな廊下に溶けていった。

第10章 湯煙に溶ける境界線、秘められた果実の熱り

脱衣所の引き戸を開けると、湿り気を帯びた熱い空気が一気に押し寄せてきた。

視界が白く煙る。

木材の香りと、鼻腔を突く濃密な硫黄の匂い。

ここは貸切の混浴露天風呂だ。

誰にも邪魔されない、俺とサオリだけの聖域。

「……先生」



背後で、サオリが小さく、震えるような声で俺を呼んだ。

振り返ると、彼女は浴衣の帯を解き、肩からずらした状態で立ち尽くしていた。

はだけた浴衣の間から、あの暴力的なまでの質量を持った双丘が、今にも溢れ出さんばかりに主張している。

湯気に濡れた長い黒髪が、白銀のような肌に張り付き、彼女の持つ「兵士」としての峻烈さを、艶めかしい「女」の情動へと塗り替えていた。

「……………こうして、無防備な姿を晒すのは……………やはり、慣れないな……………先生、あまり、凝視しないでくれ……………いや、やはり見てほしい……………矛盾しているな……………ふふっ、自分でも、何を言っているのか……………」

彼女は頬を林檎のように赤く染め、視線を泳がせながら、ゆっくりと浴衣を足元に落とすた。

露わになった、その肉体。

引き締まったウエストと、そこから急激なカーブを描いて膨らむ、重厚な乳房。

戦場で鍛え上げられたしなやかな筋肉の上に、たわわな脂肪が乗ったその身体は、破壊

的な美しさを放っていた。

特にその胸は、彼女が呼吸をするたびに大きく上下し、淡い色の先端が、期待と羞恥にツンと尖っている。

「……先生、行こう。……湯が、待っている」

サオリは俺の手を握ると、導くように洗い場を通り、露天の湯船へと足を踏み入れた。

ザアッ、と大きな音を立てて湯が溢れる。

岩に囲まれた湯船に身を沈めると、極上の熱が全身を包み込んだ。

「……っ。……はぁ……。……温かい。……これが、温泉か。……アリウスの、あの凍えるようなドラム缶風呂とは、まるで……。違う……」

サオリはふう、と長い吐息をつき、首まで湯に浸かった。

湯気の中で、彼女の瞳が潤って見える。

俺も彼女の隣に座ると、水中ではだけた彼女の肌が、俺の腕に触れた。

「……っ」

サオリが敏感に反応し、びっくりと肩を揺らす。

けれど、彼女は逃げようとはしなかった。

むしろ、吸い寄せられるように、自分から俺の方へと寄り添ってくる。

「……先生。……もつと、近くに。……。……独りでは、この熱をどう扱えばいいのか……
分からないんだ」

彼女の吐息が、俺の耳元をくすぐる。

俺は腕を回し、彼女の濡れた肩を抱き寄せた。

サオリの身体は、お湯の温度以上に熱く火照っていた。

指先が、彼女の背中の中の滑らかな肌をなぞる。

「……んっ……。……ふああ……。……先生の指……。……あ……」



サオリが目を閉じ、俺の胸に頭を預けてくる。

水中では、彼女の巨大な胸が浮力でふわりと浮き上がり、俺の脇腹に柔らかく押し当てられていた。

その、圧倒的なまでの弾力。

俺は我慢できず、彼女の顎を指先でクイと持ち上げた。

「……………あ……………」

重なり合う視線。

至近距離で見つめるサオリの唇は、お湯のせいで瑞々しく、微かに開いている。

俺はゆっくりと、彼女の唇に自分のそれを重ねた。

「……………んっ……………!？」

サオリの身体が硬直する。



けれど、それも一瞬のことだった。

彼女はすぐに力を抜き、俺の首に腕を回して、しがみつくように応えてきた。

「……………んう……………つ、……………ふ、はあ……………。……………ちゅ、……………ん……………」

熱い口付け。

湯気の匂いと、彼女の甘い吐息が混ざり合い、意識を朦朧とさせる。

サオリの舌が、恐る恐る、けれど必死に俺の舌に絡みついてくる。

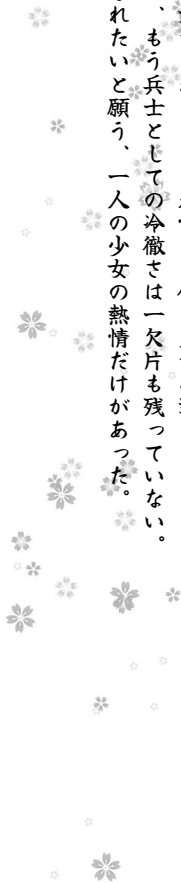
不器用で、一途な、彼女らしいキス。

「……………はあつ、……………ふう……………。……………先生、……………これ、は……………。……………。……………頭の中が、真っ白に……………。……………虚無なんて、どこにも……………ない……………」

サオリは熱に浮かされたような表情で、俺を見つめ返した。

その瞳には、もう兵士としての冷徹さは一欠片も残っていない。

ただ、愛されたいと願う、一人の少女の熱情だけがあった。



俺は親指で、彼女の乳首の突起をコリコリとなぞった。

「……………つひう!? ……あ、……………んっ、……………あ、ああ……………! ……そこ、は……………駄目だ……………
変な、感じが……………。……………お腹の奥が、ジンジンして……………」

彼女の身体が弓なりに反り、大きな胸が水面から突き出した。

湯気に濡れ、真珠のような光沢を放つ白銀の双丘。

俺は、その一方を両手で包み込み、下から押し上げるようにして形を整えた。
掌から溢れ出す、有り余るほどの脂肪。

「……………先生、……………見て。……………こんなに、大きくなって……………。……………恥ずかしい。……………でも、
先生に触られていると……………もっと、滅茶苦茶にしてほしいと……………思ってしまったんだ……………」

彼女の声は、もう甘い喘ぎにしか聞こえない。

俺は顔を近づけ、その大きく膨らんだ乳輪の中心、天を仰ぐように尖った蕾を、唇でそつと食んだ。



「……………つゝつゝつゝ!??!? ……あ、……………あああつ!!」

サオリが絶叫に近い声を上げ、俺の頭を強く抱きしめた。

口の中に、彼女の肌の熱と、温泉の味が広がる。

舌先で転がすと、サオリは激しく身悶えし、豊かな脚を水中でバタつかせた。

「……………ん、……………はあ、……………あ、……………ふう、……………あ、……………ああつ!! ……吸われて……………いる……………。……………まるで、……………赤ん坊、の……………ように……………。……………あ……………、……………先生……………!」

サオリの呼吸が荒くなる。

俺は彼女を岩場に背中を預けさせ、その豊かな胸を交互に吸い上げ、噛み締めた。
じゅるり、じゅぶり、と卑猥な音が湯船に響く。

「……………あ、……………ああつ、……………そんな……………。……………乳が出ることなど……………ないのに……………。……………なのに、……………胸が、熱くて……………。……………先生……………。……………もつと、……………もつと強く……………。……………」

私の中の、空っぽな部分を……全部、先生で埋めて……」

サオリの指が俺の髪に食い込む。

彼女は恍惚とした表情で、俺に自分の全てを捧げていた。

授乳を模したようなその行為に、彼女の本能が呼び覚まされていく。

アリウスで愛を知らずに育った彼女にとって、この密着と慈しみは、魂の飢えを癒す唯一の儀式だった。

「……っ、……んっ……！……はあ、……あ……。……胸が、高鳴る……！……
これ以上は、……もう、耐えられない……。……先生……。……私を……。……」

サオリの身体は、もう限界まで熱を持っていた。

彼女の秘丘からも、お湯とは違う熱い蜜が溢れ出し、水中で俺の太ももを撫でている。

「……部屋に、戻ろう……。……続きは、……もっと広いところで……。……先生の全部を、私に……。……刻み込んでほしいんだ……」

サオリは潤んだ瞳で俺を見つめ、震える唇で懇願した。

俺は彼女の身体を抱き抱えるようにして、湯船から立ち上がった。

水面から現れた彼女の全身は、まるで熟した果実のように赤く染まり、湯気を纏って神々しいほどにエロティックだった。

脱衣所へ戻る足取りは、もどかしいほどに重い。

互いの肌が擦れ合うたびに、火花が散るような快感が走る。

これから始まる、長い、長い夜。

温泉で温まった二人の身体が、今度は情欲の炎で焼き尽くされることになるのを、俺たちは確信していた。

第〇章 虚無を埋める白濁の熱、シーツの海で交わる吐息



部屋に戻ると、すでに真新しいシーツが敷かれた布団が二つ、隙間なく並べられていた。薄暗い間接照明だけが、しつとりとした和室を妖しく照らし出している。

障子の向こうからは、虫の音さえ聞こえないほどの静寂。

ただ、隣に立つサオリの荒い呼吸だけが、やけに大きく耳に響いた。

「……先生……」

ぼつりと、甘えたような声が落ちる。

温泉の熱で上気した彼女の頬は、薄明かりの中でもはっきりと分かるほど赤く染まっていた。

乱れた浴衣の襟元からは、あの圧倒的な存在感を放つ白い双丘が、はち切れんばかりに覗いている。

サオリは微かに震える指先で、自らその帯に手をかけた。

「……もう、隠さない。……全部、先生の好きにしてい……」



するり、と。

衣擦れの音と共に、浴衣が畳の上へと滑り落ちた。

露わになる、洗練された戦士の肉体と、それに不釣り合いなほど豊満で柔らかな曲線。彼女はゆっくりと歩み寄り、俺を押し倒すようにして布団の上へと誘った。

「……………んっ……………はぁ……………」

上から覆い被さってくるサオリの重み。

彼女の巨大な胸が、俺の胸板にムニユツと押し付けられ、形を変える。

その信じられないほどの柔らかさと、肌越しに伝わる彼女の激しい鼓動に、俺の理性が限界を迎えそうになっていた。

「……………先生の……………ここ……………こんなに、熱くなって、震えている……………私を、求めてくれてる証拠だと……………思っているのか……………」

サオリの視線が、俺の下半身へと向けられる。



彼女は躊躇いながらも、その武骨で、銃ダコのある指先をそっと伸ばしてきた。布越しではなく、直接触れられる感覚。

「……………?!? ……あ……………」

彼女の手のひらが、俺の熱を包み込んだ。

戦場を生き抜いてきた、少し硬い指先。

けれど、その不器用な手つきには、俺を喜ばせたいという、切実なまでの優しさが込められていた。

「……………ん、……………ふあ……………。……………ごめん、先生。……………こういうこと、誰かに教わったわけじゃないから……………。……………でも、先生が気持ちよくなるように、頑張るから……………」

ゆっくりと、彼女の手が上下に動き始める。

不慣れたストロークが、逆に生々しい快感となって脳を揺さぶる。

サオリ自身の呼吸も次第に荒くなり、俺の熱を握る手に、ぎゅっと力がこもった。

「……はあつ、……ふう、……んっ……。……凄い……。脈打ってるのが、私の手の中まで伝わってくる……。……先生の熱が、私の指を焦がしそうだ……」

彼女の吐息が俺の腹部に当たり、ゾクゾクとするような感覚が全身を駆け巡る。

サオリは俺の反応を確かめるように、上目遣いでこちらを見つめてきた。

その瞳は潤み、情欲に完全に支配されている。

「……先生、……声、我慢しないで。……もっと、先生が感じているところを、見たい……」

彼女はそう囁くと、今度はゆっくりと顔を近づけてきた。

長い黒髪がバラリと垂れ下がりに、俺の太ももをくすぐる。

そして、彼女の艶やかな唇が、そっと先端に触れた。

「……っ!?」

「……んむ……。……ちゅ……」



温かく、ひどく柔らかな粘膜の感触。

サオリは恐る恐る口を開き、俺の熱をその小さな口内へと迎え入れた。
息を呑むような、極上の快感。

「……………んっ、……………ちゅぶ、……………じゅるっ……………。……………はぁ……………、……………んむう……………」

アリウスの誇り高きリーダーが。

冷徹に任務を遂行する氷の狙撃手が。

今、俺の目の前で、ひざまずき、ただ一人の男に奉仕するためだけに、その舌を這わせている。

「……………ふうっ、……………ん、……………れる、……………ちゅばぁ……………。……………んんっ……………」

不器用だったはずの舌使いが、本能に従うように徐々に徐々に激しさを増していく。

彼女は自分の唾液で濡らしながら、奥へ、さらに奥へと飲み込みもうと懸命に首を振った。

時折、苦しそうに漏れる鼻声が、たまらなく愛おしい。

「……こほっ、……ん、……はあ、……あ……。……大きすぎて、口の奥に、当たって……。……でも、……嫌じゃない……。……先生の一部分が、私の中に入ってくるのが……嬉しい……」

銀糸のように伸びた唾液を拭いてもせず、彼女は濡れた唇のまま微笑んだ。

その淫らかな表情は、今まで見たどんなサオリよりも美しかった。

「……先生。……次は、これ……。……私の、これで……。……してあげる……」

サオリは身体を起こすと、自分のその規格外に巨大な双丘を両手で持ち上げた。

ぷるん、と妻まじい質量が揺れる。

彼女は俺の熱を、その深い深い谷間へと挟み込んだ。

「……っあ、……んっ……！！」



全身の血が沸騰するかのような、圧倒的な柔らかさ。

右から、左から、息が止まるほどの肉の圧力が俺を包み込む。

サオリは胸を強く寄せ合わせながら、ゆっくりと腰を浮かせ、上下に擦り付け始めた。

「……………はあつ、……………んっ、……………あ、ああつ……………！……………胸が……………、先生の硬いのに擦れて……………。……………おかしくなりそう……………」

摩擦で彼女の肌がみるみるうちに赤く染まっていく。

乳輪の先の小さな蕾が、俺の腹部を擦るたびに、彼女自身も快感に身をよじらせていた。

「……………んあつ、……………ふああ、……………あ、あ、……………んっ……………！……………先生……………、……………先生っ……………！……………熱い……………、すっごく、熱いよ……………。……………私のおっぱい、気持ちいい……………？」

普段の彼女からは想像もつかないような、甘く、だらしない声。

胸と胸の間に挟まれた熱は、彼女の柔らかな肉と体温によって、限界まで追い詰められていく。



彼女の汗ばんだ肌と、俺の肌が密着し、ちゅるり、ちゅぶり、と卑猥な水音が部屋に響き渡る。

「……………ああっ、……………ダメ、……………そんなにビクビクされたら、私まで……………っ！……………あ、……………ん、……………はあっ、……………はあっ……………」

サオリの吐息が荒れ狂う。

彼女は俺の顔に覆い被さるようにして、何度も何度もキスを降らせてきた。唇を塞がれ、お互いの唾液が混ざり合う。

「……………んちゅ、……………んむ、……………はあ……………先生、……………出して……………私のために、我慢しないで……………」

限界だった。

彼女の献身的な愛撫と、その圧倒的な母性すら感じさせる肉体の圧力に、ついに俺の奥で熱い衝動が弾けた。



「……っ！」

「……んっ、……あ、……くる……！……先生、……顔、……見せて……！」

俺が腰を跳ねさせると同時に、サオリは胸の谷間から俺の熱を解放し、自らの顔をそこへ近づけた。

そして、パクリと。

「……んっ！……っ、……んぐ……、……こくっ……」

勢いよく噴き出した白濁の熱を、彼女は一滴も逃さないように口で受け止めた。

彼女の喉が鳴る音が聞こえる。

熱く、濃密なそれが、彼女の体内へと飲み込まれていく。

「……ん……、……ちゅば……ふはあっ……」



すべてを受け入れた後、サオリはゆっくりと口を離した。

唇の端から、飲み切れなかった白い液体が、タラリと伝い落ちる。

彼女はそれを舌で舐め取ると、恍惚とした表情でふにやりと笑った。

「……はあ、……ん……。……先生の……。全部、飲んだよ……」

サオリは俺の胸の上に力なく倒れ込み、その大きな胸を押し当てながら、荒い息を繰り返した。

彼女の身体は汗だくで、信じられないほどの熱を帯びている。

「……あたたかい……。……私の中が、先生の熱で、いっぱいになった……。……もう、虚しくなんてない。……どこを探しても、こんなに満たされる場所なんて、他になかったんだ……」

彼女は俺にすり寄るように、首筋に顔を埋めた。

甘い、甘い吐息が、俺の肌を撫でる。



「……先生……。……愛してる。……この命が燃え尽きるまで、……いや、燃え尽きても……。……私を、ずっと……。離さないで……」

シーツの海に沈みながら、二人の熱い吐息は、夜の静寂の中に溶け合っていた。

第4章 胎動する深淵の熱、虚ろな器を昂りて満たして

シーツの上に散らばった熱い吐息が、部屋の湿った空気をさらに濃密に変えていく。

先ほど飲み干したはずの熱が、まだ喉の奥に、そして胸の深くにこびりついているような感覚。

サオリは俺の胸に頬を寄せたまま、自身の大きく波打つ双丘を、俺の腕に無防備に押し付けていた。

「……はあ、……。はあ……。……先生。……まだ、身体が……。震えているんだ。……。……」

自分でも、どうしていいか分からない。……アリウスでは、こんな……内側から焼き尽くされるような感覚、誰も教えてくれなかった……」

彼女が顔を上げると、その瞳は潤みを通り越し、蕩けるような情欲の色に染まっていた。

汗ばんだ長い黒髪が、赤く火照った首筋や、豊満な乳房の重みに張り付いている。

サオリはふらりと身体を起こすと、膝立ちになって俺の股間を再び覗き込んだ。

「……っ、……あ……。……先生、……もう、こんなに……。……さっき出したばかりなのに、……。……また、私を求めてくれていたのか……。？」

驚きと、それ以上の歓喜が彼女の表情に弾ける。

彼女は自分の両手で、その規格外の乳房をぎゅっと中央に寄せた。

左右から押し潰された脂肪が、逃げ場を失って上へと盛り上がり、深い、あまりにも深い峡谷を作り出す。

「……もつと、……もつと私を、めちゃくちやにしてほしい。……。……先生の熱いので、……」

私のこの、持て余した肉を……全部、汚して……」

サオリは自ら俺の熱を、その肉の深淵へと再び挟み込んだ。

今度は、先ほどよりもずっと強く、執拗に。

彼女は腰を激しく振り、胸の肉を波打たせながら、俺を翻弄し始める。

「……………んっ、……………ふああっ、……………あ、ああっ……………!!……………熱い、……………先生のここ、……………さつきよ
りずつと硬い……………。……………私の胸が……………潰されそうに……………。……………あ、……………んんっ……………!!」

じゅぶり、じゅるり、と。

彼女の汗と、先ほどの残り香が混ざり合い、卑猥な音を立てて熱を包み込む。

サオリは恍惚とした表情で、自分の胸が俺の熱によって形を変え、蹂躪される様を見つめていた。

「……………はあっ、……………あ、……………先生……………あ、……………ああっ!!……………気持ちいい……………おっ
ばいが……………熱くて、……………溶けちゃう……………!!……………んんっ、……………はあっ……………はあっ……………!!」

彼女の大きな蕾が、俺の腹部を何度も何度も擦過し、火花が散るような快感を煽る。

俺が彼女の腰を掴んで引き寄せると、サオリは「っあ!？」と声を上げ、さらに激しく胸を突き出してきた。

「……………あ、……………ん、……………ああっ! ………………だめ、……………もう、……………がまん、できない……………
先生、……………出して、……………おっぱいに、……………いっぱい、……………かけて……………っ!!!」

サオリの絶叫と共に、俺の奥で溜まった熱が、再び限界を突破した。
彼女の豊かな谷間を割るように、勢いよく白濁の奔流が噴き出す。

「……………っ!!! ………………ん、……………んんっ、……………ああああっ!!!」

ドクドクと、彼女の胸元、そして首筋から顎にかけて、熱い雫が飛び散った。

サオリは目を剥き、全身を弓なりに反らせて、その熱を全身で浴びる。

白銀の肌に、ドロリとした白濁が絡みつき、ゆっくりと乳房の膨らみを伝い落ちていく。

「……はあ、……ん、……ふう……。……すごい……。……いっぱい……。……先生の……。……
しる……。……。……ふふ、……。……見て、……。……こんなに、……。……真っ白に……。……」

サオリは指で自分の胸に付着した熱を掬い、それをうつとりと眺めた後、自身の舌でゆっくりと舐めとった。

その光景は、戦場の冷徹なリーダーとしての彼女を完全に否定する、背徳的で凄まじい色気に満ちていた。

「……でも、……。……まだ……。……。……外側だけじゃ、……。……足りないんだ……。……」

サオリは俺の顔を覗き込み、潤んだ瞳で訴えてくる。

彼女はゆっくりと横たわり、自らの脚を大きく左右に割り広げた。

「……先生、……。……中を……。……。……私の中を、……。……先生で、……。……ぐちゃぐちゃにして……。……
虚しいなんて……。……二度と言えなくなるくらい、……。……深く……。……。……刻み込んで……。……」

露わになった彼女の秘所は、すてにお湯と蜜で溢れかえり、俺の侵入を今か今かと待ちわびていた。

俺は彼女の身体を抱き込み、その熱い入口へと自身の先端を押し当てた。

「……………あ、……………ああっ……………。……………入ってくる……………、……………先生が……………。……………んんっ……………、……………あ、……………ああっ……………！！！」

ゆっくりと、けれど確実に、彼女の深淵へと沈み込んでいく。

サオリの身体は驚くほどタイトで、それでいて熱い。

戦士としての引き締まった筋肉が、俺の熱を全方位から締め上げ、奥へ奥へと誘い込む。

「……………ん、……………はあっ、……………あ、……………ああっ！……………ふああ……………っ、……………先生っ、……………先生……………っ！……………すごい……………、……………奥まで、……………届いてる……………。……………私、……………繋がってるんだ……………、……………今……………」



サオリは俺の背中に爪を立て、必死にしがみついてくる。

俺が腰を動かすたびに、彼女の大きな胸がぶるぶると揺れ、俺の胸板とぶつかり合う。ぐちゅり、と。

互いの体液が混ざり合う音が、部屋の静寂を掻き消していく。

「……はあっ、……ん、……あ、……あ、……ああっ！……だめ、……そこ、……そこ、……あ、……頭が……っ、……しびれる……！……んっ、……あ、……ああっ、……先生っ、……先生え……！！」

サオリの声が、次第に言葉にならない叫びへと変わっていく。

彼女は首を左右に振り、恍惚の表情で俺の突き上げを受け止めていた。

アリオスの掬も、過去の怨念も、今の彼女にとっては全てが虚空の彼方だ。

ただ、この結合の熱だけが、彼女にとっての唯一無二の真実だった。

「……胸が、……高鳴る……！……苦しいの、……もつと、……もつと激しくして……！……私を、……壊してもいいから……！……先生……、……あ、……あ、……あああ

あっ!!」

絶頂が近いことを悟ったサオリが、腰を必死に跳ね上げ、俺を離さないように脚を絡めてくる。

俺もまた、彼女の熱すぎる胎内に翻弄され、最後の理性が弾け飛んだ。

「……………っ!! ……あ、……………ああっ……………!!」

俺が彼女の奥深くに、ありったけの熱を叩き込む。

それと同時に、サオリも大きな震えと共に絶頂を迎え、俺の熱を絞り出すように激しく収縮した。

「……………んっ!! ……あ、……………あ、……………ああああああああっ……………!!」

彼女は白目を剥き、激しく身悶えしながら、俺の腕の中で果てた。
噴き出した俺の熱が、彼女の器を隅々まで満たしていく。



サオリは力なくシーツに沈み込み、大きく肩で息を繰り返した。

「……………はあ、……………はあ、……………はあ……………。……………先生……………。……………今、……………私の中に……………、……………先生が……………。……………ふふ……………」

サオリは力を振り絞り、身体を起こして俺の方を見た。

その顔、鼻筋から頬、そして唇にかけて、俺の熱い雫がまだべつとりと付着している。顔射されたその姿は、あまりにも淫靡で、それだけで深い愛に満ちていた。

「……………汚れてしまったな。……………でも、……………これが、……………先生との、……………絆の証だとしたら……………。……………私は、……………一生、……………このままがいい……………」

彼女は俺の顔に手を添え、優しく引き寄せた。

熱い、甘い吐息が再び混じり合う。

部屋には、二人の愛の営みの跡が、濃密な匂いとなって漂っていた。



「……先生。……。……もう一度、……。最初から……。……。夜は、……。まだ……。終わっていないのだから……」

サオリは、顔に付いた白濁を誇らしげに晒しながら、挑発するように微笑んだ。

第の章 朝焼けに溶ける虚無の殻、何度でも重ね合う確かな鼓動

障子越しに差し込む薄明かりが、静まり返った部屋の空気を青白く染め上げていた。

遠くて微かに野鳥のさえずりが聞こえる。

温泉街の朝は早い。だが、この部屋の中だけは、昨夜の狂おしいまでの熱気がまだ生々しく居座っていた。

「……ん、……。はあ……」

胸元に感じる、ずっしりとした柔らかな重みと、規則正しい温かな吐息。

目を覚ますと、俺の腕の中には、力尽きたように眠るサオリの姿があった。

戦場では決して見せることのない、無防備で穏やかな寝顔。

掛け布団から無造作にはみ出した彼女の肌には、昨夜俺が刻み込んだ無数の赤い痕と、乾ききっていない汗の反射が、朝の光を浴びて艶めかしく光っている。

そして何より、俺の胸板を押し潰すように密着している、その規格外に巨大な双丘。

呼吸のたびに大きく形を変えるその膨らみは、ただそこにあるだけで、強烈に俺の理性を揺さぶってくる。

「……………んっ、……………ふあ……………先生……………？」

俺がそっと彼女の黒髪を撫でると、長いまつ毛が震え、サオリがゆっくりとまぶたを開いた。

寝起きの潤んだ瞳が、至近距離で俺を捉える。

状況を把握するのに数秒かかった後、彼女は自分の身体が完全に俺と重なり合っていることに気づき、ふにやりとだらしのない笑みを浮かべた。



「……おはよう、先生。……。……不思議だな。……目が覚めた瞬間から、こんなに心が満たされているなんて……。……アリウスの冷たい地下室では、朝を迎えること自体が苦痛だったのに」

サオリはそう呟きながら、俺の首筋に顔を埋め、子猫のようにすりすり頬を擦り寄せてきた。

「……先生の匂い。……。……私、……。……昨日の夜、……。……すごく、汚い姿を……。……見せてしまったな……。……」

彼女は、昨夜顔射され、白濁に塗れたまま俺を食った自分自身の姿を思い出したのか、頬を朱に染めて微かに身じろぎした。

その拍子に、彼女の豊かな胸が俺の胸板でばると跳ね、熱を帯びた肌同士が擦れ合う。

「……あ、……。……んっ……。……」



ただそれだけの摩擦で、サオリの口から甘い吐息が漏れた。

一度完全に開発されてしまった彼女の身体は、些細な刺激にもひどく敏感に反応するようになっていた。

俺の下半身も、朝の生理的な現象に加え、彼女の圧倒的な肉感に当てられ、すでに硬く熱い昂りを取り戻しつつあった。

それが、密着した彼女の柔らかな太ももの内側に、コン、と当たる。

「……………っ！ ……あ……………先生、……………また、こんなに……………元気、だな……………ふふっ」

サオリは驚くどころか、嬉しそうに目を細め、布団の中で自ら脚を僅かに開いた。

昨夜、俺の熱を何度も受け入れたその秘所は、まだとろとろに潤い、甘い匂いを漂わせている。

「……………先生……………私……………私……………まだ、足りないみたいだ……………先生の一部を、……………もう一度……………私の中に、刻み込んでほしい……………」

彼女の懇願するような、ひどく色っぽい声。

アリウススクワッドを率いる冷徹なリーダーの面影は、もはや欠片もない。

そこにあるのは、俺という男に身も心も捧げ尽くし、ただ愛されることだけを求める一人のメスだった。

「サオリ……」

「……うん、……来て、……先生……。……私の中、……昨日の先生の残りで、……まだ、ぐじゅぐじゅ、だから……」

サオリは仰向けに寝転がると、自らの手で大きく両脚を割り広げた。

朝の光に照らされたその奥は、彼女の言葉通り、ひどく淫らな水音を立てながら、俺の侵入を今か今かと待ち構えている。

俺は彼女の上に覆い被さり、その豊満すぎる胸を両手で鷲掴みにした。

「……っああっ！……ん、……はあっ……。……朝から……。……おっぱい、そんなに強く

……。……んんっ、……気持ち、いい……」

指の間から溢れ出すほどの、暴力的な質量。

掌で揉みしだき、乳輪の先にある淡い蕾を親指でカリカリと弾くと、サオリの身体がビクンビクンと大きく跳ねた。

「……はあっ、……ふああっ、……あ、あ、……ダメ、……そこ、……昨日の夜から、ずっと敏感で……。……んんっ、……ああっ、……先生、……先生っ……。……！」

彼女の吐息が、みるみるうちに荒れ狂っていく。

俺は彼女の唇を塞ぎ、熱い唾液を絡め合わせながら、濡れそぼった彼女の最奥へと、自身の昂りをゆっくりと沈め込んだ。

「……んんっ!!!!……あ、……あ、……あああっ……。……!!」

入り口を抜けた瞬間、サオリが俺の背中に爪を立て、絶叫に近い声を上げた。

すでに柔らかく解れているはずなのに、彼女の引き締まった腹筋と、内部の熱い粘膜は、俺を逃さないばかりに強烈に締め付けてくる。

ずぶり、ずちゅり。

重い水音と共に、一番奥まで到達した。

「……………はあ、……………はあ、……………つああ……………！……………入った、……………先生が、……………また、私の一番深いところに……………っ！……………すごい、……………昨日の夜より、……………もっと熱く感じる……………っ！」

サオリは恍惚とした表情で、繋がった部分を自ら締め上げるように腰を動かした。

俺もまた、その耐え難い快感に突き動かされるように、ゆつくりと、そして次第に激しく腰を打ち付け始める。

「……………あ、……………ああっ、……………んっ、……………んっ！……………だめ、……………いきなり、そんな奥まで……………っ！……………あ、……………ああっ、……………おかしくなる、……………私、……………また、おかしくなっちゃう……………っ！！」

パンツ、パンツと、肌と肌がぶつかり合う音が部屋に響き渡る。

俺が突き上げるたびに、サオリの巨大な胸が空中で激しく弾み、その重さで彼女自身の鎖骨やあばらを叩きつける。

その視覚的な暴力性と、内部の狂おしいまでの熱と締め付けに、俺の理性が再び吹き飛んでいく。

「……………はあっ、……………ふああっ、……………あ、あ、……………先生、……………先生っ！！……………すごい、……………中、……………擦れてる、……………あ、……………あああっ！！」

サオリの悲鳴のような喘ぎ声が止まらない。

彼女は首を左右に振り乱し、黒い髪をシーツに散らばせながら、俺の突き上げを全身で受け止めている。

もはや自分がアリウスの生徒であることすら忘れているかのような、ただ快樂だけに溺れる姿。

「……………胸が、……………高鳴る……………！！……………苦しいくらい、……………先生の愛が、……………私の中にぶつかってきて……………っ！……………もっと、……………もっと私を、壊して……………っ！」

彼女は俺の首にしがみつき、耳元で甘く、そして淫らな吐息を吹き込んできた。

「……先生、……私、……気持ちいい……。……先生とするの、……すごく、気持ちいいよ……。っ……。……空っぽだった私の中が、……先生の熱で、ぐちゃぐちゃになるのが……。……たまらなく、幸せ……。っ！」

正直すぎる言葉。

彼女が自分の口から「気持ちいい」と、ありのままの情動を伝えてくれたことが、俺の奥底にある支配欲と庇護欲をさらに煽り立てた。

「俺も……。サオリの中、すごく熱くて……。最高に気持ちいいよ」

「……。っ！……。あ、……。ああっ！……。先生……。っ！……。言葉、……。ずるい……。……そんなこと言われたら、……。私、……。もつと、……。締まっちゃう……。っ！」

サオリの胎内が、俺の言葉に反応するように、ぎゅうっつと恐ろしい力で収縮した。

まるで、俺の存在そのものを彼女の胎内に取り込もうとするかのような、妻まじい求心力。

俺の限界も、もうすぐそこまで迫っていた。

「……あ、……くる、……先生、……くる……っ！……私、……また、いつちやう……っ！」

「……サオリ、……一緒に行こう……！」

「……うんっ、……うんっ！！……先生、……中に出して……っ！……私の中に、……先生の熱い、……全部、ぶち撒けて……っ！！」

サオリは俺の腰に自身の脚を強く絡めつけ、決して逃がさないというように鍵をかけた。彼女の大きな胸を両手で強く揉みしだきながら、俺は限界までの力で、彼女の最奥へと最後の一撃を叩き込んだ。

「……っ！！」

「……んんんっつ！！！！……あ、……あ、……ああああああつっ！！！！」



サオリの身体が、電流を流されたようにピンと跳ね上がる。

白目を剥き、口からだらしない涎を垂らしながら、彼女は俺の腕の中で狂ったように絶頂を迎えた。

同時に、俺の奥底から爆発した白濁の奔流が、彼女の最も深い場所へと、勢いよく射出される。

「……………あ、……………あ、……………ああっ……………あっつい、……………あっついよお……………っ……………先生の、……………
いっばい、……………お腹のなかに……………ああっ……………」

ドクン、ドクンと、俺の熱が彼女の胎内を満たしていく。

サオリはその熱を一つ残らず受け止めるように、内部の肉を激しく痙攣させながら、俺の先端をちゅうちゅうと吸い上げていた。

「……………はあっ、……………はあっ、……………あ、……………んんっ……………」

互いに限界まで達した絶頂の余韻。



俺は彼女の上に崩れ落ち、その豊満な胸の谷間に顔を埋めて、荒い息を繰り返した。
結合部からは、俺が注ぎ込んだ大量の白濁と、彼女自身の溢れるような蜜が混ざり合い、
とろとろとシートへと零れ落ちていく。

「…………ふう、…………はぁ、…………ん…………」

サオリは俺の頭を優しく撫でながら、虚ろな、それでいてひどく満ち足りた表情で天井を
見つめていた。

「…………先生……………すごかった……………昨日の夜も……………今のも……………私……………頭
の芯まで真っ白になって……………自分が誰なのかも分からなくなるくらい……………気持ちよかつ
た……………」

彼女はぼつりぼつりと、掠れた声で素直な感情をこぼす。

俺は顔を上げ、彼女の汗ばんだ額にキスを落としました。



「……私も、……先生を気持ちよく、できたかな……？ ……私の身体で、……先生、……満足してくれた……？」

不安げに、上目遣いで尋ねてくる彼女。

その巨大な胸と、戦士として鍛え抜かれた肉体からは想像もつかないほど、健気で愛らしい女の顔だった。

「もちろんだよ。サオリの身体、最高に熱くて、全部が気持ちよかった。……愛してるよ」
「……っ！ ……あは、……あはは……」

俺の言葉を聞いた瞬間、サオリの目からホロリと涙がこぼれ落ち、そして、ふはっ、と彼女特有の笑い上戸な笑い声が漏れた。

「……ごめん、……涙が、止まらなくて、……。……でも、……可笑しいんだ。……『全ては虚しい』なんて言い続けてきた私が、……今、こんなにも満たされて、……世界で一番の幸せ者だなんて……」



彼女は俺の顔を両手で包み込み、引き寄せて、深く、甘いキスをした。

「……ありがとう、先生。……私に、生きる意味をくれて。……この喜びを、教えてくれて。……私、……もう絶対に、先生を離さないから……」

朝の光が完全に部屋を満たし、白銀の肌を眩しく照らし出していた。

互いの体温と、生々しい愛の痕跡。

バナタスの呪縛から完全に解き放たれたサオリは、ただ愛する人の温もりの中で、この上なく幸せそうな微笑みを浮かべていた。

この絆の温かさだけは、永遠に虚無へと消え去ることはない。俺たちは確かに、そう信じ合うことができた。

エピローグ…虚無の果てに灯る火、解けない熱と永遠の契約



温泉旅行から戻って数日。

シャーレの執務室には、いつものように静かな夜が訪れていた。

デスクの上の書類は片付き、窓の外にはキヴォトスの煌びやかな夜景が広がっている。

けれど、あの温泉での濃厚な時間は、記憶の片隅に追いやられるどころか、今も俺の肌
に、鼻腔に、生々しくこびりついて離れない。

そして、それはきつと俺だけではないはずだ。

「……失礼する。先生、まだ起きていたか」

ノックと共に、聞き慣れた、けれど以前よりもどこか柔らかさを帯びた声が響く。

扉を開けて入ってきたのは、アリウススクワッドのリーダー、サオリだった。

いつものキャップにヘソ出しのインナー、そして白いコート。

けれど、その表情にはかつての冷徹な「兵士」としての刺々しさはなく、どこか潤んだ、
艶やかな色が混じっている。

「……アツコたちが、先生にこれを渡してほしいと。……ブラッグマーケットで見つ

けた、出所の怪しい栄養ドリンクだそうだ。……ヒヨリは『これを飲めば先生も倒れません!』と泣きながら言っていたし、ミサキは呆れていたが……」

サオリは手土産の紙袋を机に置くと、ふっと微笑んだ。

アツコたちメンバーも、サオリの変化に気づいているのかもしれない。以前よりも格段に表情が豊かになり、笑うことが増えた彼女のことを。

「……………。…………。先生。…………何を見ている。…………私の顔に、何か付いているか?」

「いや、サオリが綺麗だなんて思ってた」

「…………つ!? ……………。…………バ、バナタス…………。…………突然何を…………。…………。…………そんなこと、あの夜に散々言っただではないか…………」

サオリは真っ赤になって顔を伏せたが、その視線は隠しきれない熱を帯びて俺を捉えていた。

彼女はゆっくりとデスクの裏側に回り込み、俺の隣に立つ。

コートの袖が触れ合う距離。

それだけで、あの温泉での激しい夜の記憶がフラッシュユバックする。
サオリの手が、震えながら俺の肩に置かれた。

「……先生。……あの場所から戻ってから、……ずっと、胸が騒がしいんだ。……ア
リウスのモットーを思い出そうとしても、……先生に触れられた場所が熱くて、……全て
が空虚だなんて、どうしても思えなくて……」

彼女は意を決したように、俺の膝の間に割り込むようにして跪いた。

上目遣いで俺を見つめるその瞳は、情欲と愛情が混ざり合い、蕩けきっている。

「……責任を取ってくれ。……私を、……こんな身体にしてしまった、……責任を……」

サオリは震える指先で、俺のズボンのベルトに手をかけた。

迷いのない、けれどひどく猥褻的な手つき。

彼女はそのまま、慣れた様子で俺の昂りを解放した。

数日ぶりの対面に、俺の熱はすでに限界まで膨らみ、彼女の顔のすぐ近くで脈打ってい

る。

「……………あ……………。……………すごい。……………先生も、私を待っていてくれたのか……………？」

サオリは愛おしそうにそれを両手で包み込んだ。

戦士の硬いタコがある掌。

けれどその内側は、お湯のように温かく、驚くほど優しい。

彼女はゆっくりと顔を近づけ、まずは先端に、チュッと音を立ててキスをした。

「……………ん、……………はあ……………。……………いい匂いだ。……………先生の、匂い……………」

彼女はそのまま口を開き、俺の熱を深く、喉の奥まで迎え入れた。

「……………んむ、……………じゅぶ、……………んんう……………っ」

温泉の時よりも、ずっと官能的な技術。



彼女は俺の顔をじっと見つめながら、舌を複雑に絡ませ、喉を鳴らして奉仕する。俺が声を漏らすたびに、彼女の瞳に愉悦の色が浮かび、吸い付く力が増していく。

「…………ふはあつ、…………ん、…………ちゆる、…………れる…………つ…………んんつ…………、…………んむう…………!!」

口内を満たす熱い脈動を、サオリは一滴の蜜も逃さないように味わい尽くす。やがて彼女は口を離すと、銀色の糸を引く唇で艶然と笑った。

「…………次は、…………これだ…………」

彼女は立ち上がり、白いコートをバサリと椅子に脱ぎ捨てた。

そして、黒いインナーの裾を掴み、一気に捲り上げる。

露わになる、あの暴力的なまでの質量を持った双丘。

温泉で何度も揉みしだき、白濁で汚した、白銀の果実。

サオリはそれを自らの腕でぎゅっと寄せ、俺の熱をその深い深い谷間へと挟み込んだ。



「……………あ、……………ああっ……………。……………先生、……………見て。……………おっぱい、……………こんなに赤くなってる……………。……………挟まれてる感触だけで、……………私、……………イっちゃいそう……………」

ムニユツ、という生々しい音。

サオリは腰を激しく振り、自身の巨大な胸の肉で俺を蹂躪し始めた。

右から、左から。

柔らかすぎる脂肪の壁が、俺の熱を全方位から圧迫し、狂わせる。

「……………はあっ、……………あ、……………んっ、……………あ、あ、……………あああっ！！……………先生……………っ！……………おっぱい、気持ちいい……………？……………。……………私の、……………この無駄に大きい肉が、……………先生の役に立ってる……………？」

彼女は恍惚とした表情で、自分の胸が俺の昂りによって歪められる様を見つめていた。

乳首の先が、俺の腹部を擦るたびに、サオリもまた背中を反らせて甘い喘ぎを漏らす。

「……………あ、……………だめ、……………くる、……………先生……………っ！……………出すなら、……………今度は、……………ここ

に、……いっばい……っ!!」

サオリが胸をさらに強く突き出した瞬間、俺の奥底で溜まっていた熱が一気に爆発した。ドクドクと、彼女の豊かな谷間を割るように、勢いよく白濁の奔流が噴き出す。

「……っ!! ……あ、……んんっ、……あああああっ!!」

彼女の白い肌を、俺の放った精がドロドロに汚していく。

サオリは目を剥き、全身を震わせながら、その熱い雫が自分の胸を伝い落ちるのを、うつとりと見つめていた。

「……はあ、……はあ、……ん……。……すごい、……いっばいだ……。……先生……。……でも、……。……まだ、……。……足りないんだ……」

サオリは潤んだ瞳で俺を見上げ、自身のインナーを脱ぎ捨てた。

完全に裸体となった彼女は、俺の手を引いて、執務室のソファへと押し倒した。

彼女の秘所からは、すでに我慢できないほどの蜜が溢れ出し、太ももを濡らしている。

「……中、……入れて……。……先生がいないと、……私、……もう生きていけない……。……虚無を、……全部、……先生の熱で、……焼き尽くして……。っ！！」

サオリは自ら俺の熱を手に取り、自身の入り口へと導いた。
そして、ゆっくりと、けれど一気に腰を下ろす。

「……っああああああっ！！……あ、……あ、……ああああああっ！！」

結合。

温泉の時よりも、さらに熱く、さらに深く。

彼女の胎内は、俺を迎え入れた瞬間に狂ったように収縮し、逃がさないとばかりに締め付けてきた。

「……んんっ、……あ、……ああっ！……すごい……。……入った、……先生が、……私

の、……一番奥まで……っ！！」

サオリは俺の肩に顔を埋め、激しく呼吸を乱しながら、腰を打ち付け始めた。
ぐちゅり、じゅぶり、と。

静かな執務室に、卑猥な摩擦音と、二人の重なり合う喘ぎ声だけが響き渡る。

「……はあっ、……はあっ、……あ、……あ、……あ、……あああっ！！……先生、……先生っ！……そこ、……そこおっ！……頭が、……真っ白に、……なっっちゃう……っ！！」

俺が下から激しく突き上げると、サオリの大きな胸が波打ち、俺の視界を塞ぐ。

汗の匂い、愛液の匂い、そしてサオリ自身の甘い香りが混ざり合い、理性を溶かしている。

「……あ、……ああっ！……先生、……大好き……っ！……愛してる……っ！……私を、……先生だけの、……ものにして……っ！！」



サオリは狂おしいほどの情熱を込めて、俺を抱きしめた。

彼女の身体は火のように熱く、その拍動は俺の全身へと伝わってくる。

虚無の淵にいた彼女が、今、俺との結合を通じて、これ以上ないほどの「生」を謳歌していた。

「……………あ、……………くる、……………いく……………っ！……………先生、……………いっしょに……………っ！……………私の中に、……………全部、……………出してええええっっ！！」

サオリの胎内が、限界を超えた激しい痙攣を始めた。

俺もまた、彼女の圧倒的な愛の深さに飲み込まれ、最後の熱を彼女の最奥へと叩き込んだ。

「……………っ！！……………あ、……………ああああああっっ！！」

「……………んんんんっっ！！……………あ、……………あ、……………あ、……………あ、……………あああああああああああ
っっっっ！！！！」



サオリは白目を剥き、全身を弓なりに反らせて、絶叫と共に果てた。

俺の放った大量の白濁が、彼女の器を隅々まで満たし、溢れさせていく。

サオリは力なく俺の胸に倒れ込み、激しく肩で息をしながら、痙攣する足で俺を強く抱きかかえていた。

「……はあ、……はあ、……はあ……。……先生……」

静寂が戻った部屋。

サオリは俺の胸に耳を当て、トクトクと刻まれる鼓動を確かめるように目を閉じた。

「……あたたかい。……先生の熱が、……私の中で、……ずっと、……響いてる……」

彼女はゆっくりと顔を上げると、涙に濡れた瞳で、けれど最高に幸せそうな微笑みを浮かべた。

「……最高に、……気持ちよかった。……私、……今なら、はっきりと言える。……」



世界は、……決して虚しくなんてない。……先生が、……私の側にいてくれる限り……」

サオリは俺の顔を両手で包み、優しくキスをした。
それは、未来を誓う、永遠の契約のようだった。

「……愛してる。……。……これからも、……ずっと……」

窓の外、キヴォトスの夜明けはまだ遠い。

けれど、二人の心には、どんな暗闇も照らし出す、消えることのない情熱の火が灯っていた。

虚無の果てに掴んだのは、決して色褪せることのない、真実の愛。
俺たちは、重なり合ったままの熱を慈しむように、深い眠りへと落ちていった。

く完く

